



自身も盛岡に暮らして1年あまり。高濱さんは日常を過ごす公園に、「過ごしたい場所」があることが大事と感じています

同事業を担当する盛岡市都市整備部長・高濱康巨さんに、その狙いを伺いました。

「公園の維持管理費用は大きな課題ですが、現在整備を進める3つの公園は、そうしたネガティブな思考だけでなく、積極的にまちの賑わいをつくっていきたいという考えに基づき取り組みです。盛岡城跡公園芝生広場整備の事業者決定直後は、市民の皆さんから不安の声も届きましたが、目的は商業施設をつくることではありません。これからの都市公園は量を造る時代ではなく、質を高める時代。公園それぞれの個性が重要となります。盛岡の中心市街地活性化は以前から大きな課題でしたが、今回の制度改正によって起爆剤となる場を創出できるのではないかと、中心部に魅力ある空間が生まれることによる周辺への波及効果も狙いの一つです」。

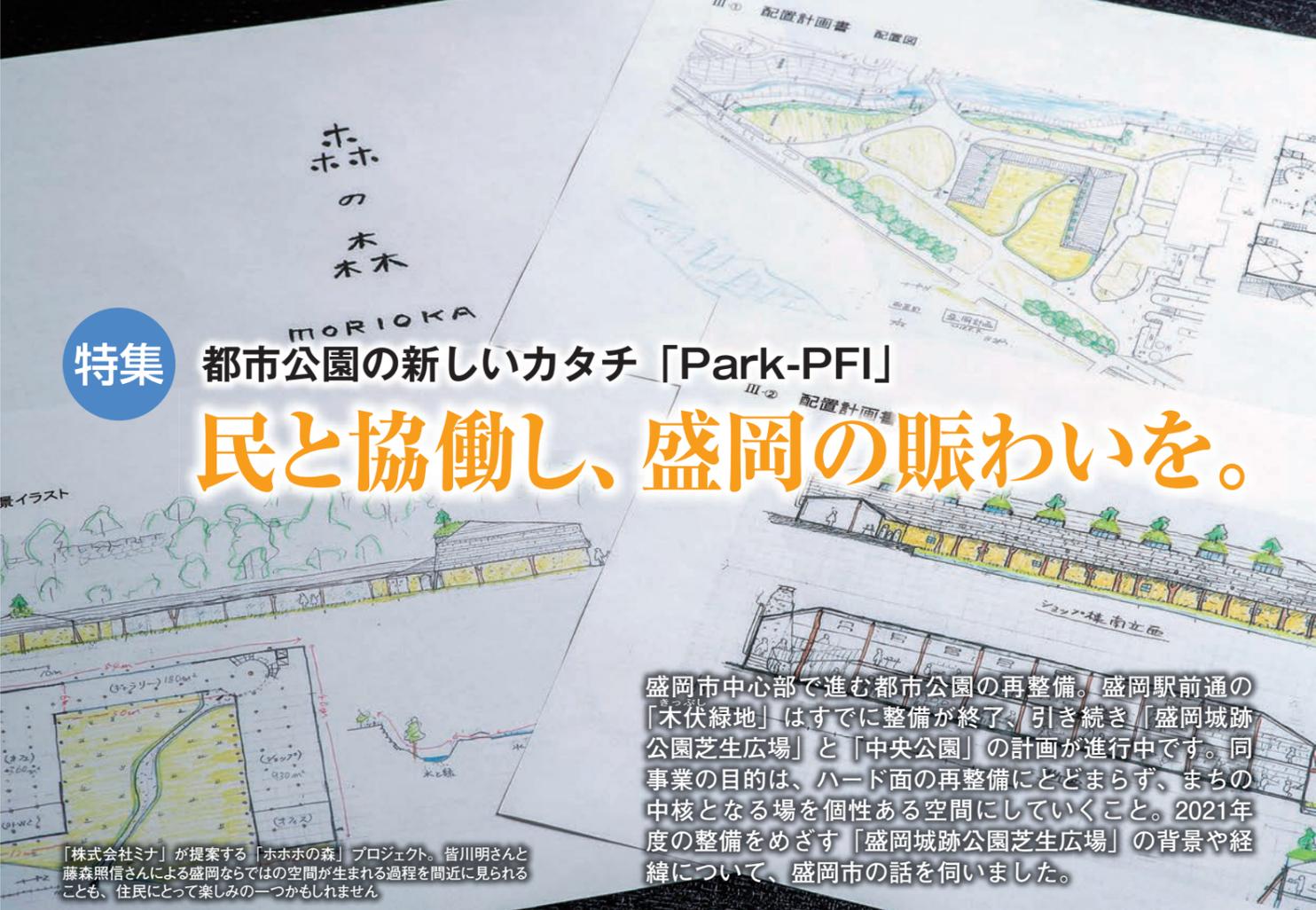
オープンな景観を楽しむそれが「木伏緑地」らしさ

一足早く整備された「木伏緑地」は、2019年9月から営業をスタートしています。全国でPark PFI導入が進行する中、運営開始は「木伏緑地」が全国3番目でした。居酒屋やカフェ、ジェラート店など個性あふれる飲食店だけでなく、ウッドデッキや芝生広場が続くオープンな景観に誘われて幅広い層が訪れます。盛岡市では、昨年10月と11月、来園者に対するアンケートを実施。129名の回答中約8割が「満足している」「建物が周辺環境と調和している」と答えています。「店舗だけでなく緑地全体を気に入っていただいている。それを実際の声として確かめられたことは次への弾みになる」と高濱さん。

「史跡と公園については、2つの価値を双方向から高めていけば、盛岡城跡の魅力の更なる発信につながり、ひいては盛岡全体の価値向上にもつながると考えます。そして、ここを起点にもっと周囲へ人が流れ、歩いて楽しむまちという大きな目標が達成できると思えます」と期待を寄せます。

中心部にある盛岡城跡公園の課題

盛岡市中心部で進む都市公園の再整備。盛岡駅前通の「木伏緑地」はすでに整備が終了、引き続き「盛岡城跡公園芝生広場」と「中央公園」の計画が進行中です。同事業の目的は、ハード面の再整備にとどまらず、まちの中核となる場を個性ある空間にしていこうこと。2021年度の整備をめざす「盛岡城跡公園芝生広場」の背景や経緯について、盛岡市の話をお伺いしました。



特集

都市公園の新しいカタチ「Park-PFI」

民と協働し、盛岡の賑わいを。

「株式会社ミナ」が提案する「ホホホの森」プロジェクト。皆川明さんと藤森照信さんによる盛岡ならではの空間が生まれる過程を間近に見られることも、住民にとって楽しみの一つかもしれません

現在、盛岡市にある都市公園は大合わせて475カ所。その中で、盛岡を代表する都市公園の一つが「盛岡城跡公園（正式名称・岩手公園）」です。盛岡市ではその整備と活用に向けた施策を数年前から進めてきました。史跡指定範囲内の整備については「史跡盛岡城跡整備基本計画」のもと、史跡をしっかりと守る取り組みを推進。一方、史跡指定範囲外に位置する芝生公園付近は、市民が気軽に立ち寄れる場として一層魅力を高めるべく検討を重ねてきたのです。

しかし、公園全体の樹木整備や史跡内にあるトイレの建て替え問題など、公園維持管理にかかる予算捻出は大きな課題です。人口減少に伴う税収減から予算は年々削減傾向にあり、安定した都市公園機能と魅力ある場の維持を行政のみで行うことは、将来的に難しくなることが予想されます。

その過程で注目したのが、全国的に導入が進む「公募設置管理制度」Park PFI（以下Park PFI）でした。

都市公園は次のステージへ

2017年の都市公園法改正によって制定された「Park PFI」は、飲食店や売店等の公園施設設置また

まちなかに生まれる「ホホホの森」への期待

盛岡市が、パートナーになる事業者に対して望むのは「地域を真摯に考え、持続可能なプランを打ち出しているか」。盛岡城跡公園芝生広場整備事業は、2019年3月の「緑のまちづくり会議」による審査で「株式会社ミナ」に決定しました。同社は、服飾デザイナーの皆川明さんが設立したファッションブランド「ミナ・ペルホネン」を運営する会社。東京、京都、金沢などに店舗展開する「ミナ・ペルホネン」は、オリジナル図案とストリー性あるデザインで国内外から高い評価を得るブランドであり、家具・陶磁器など、生活アイテムも幅広く手がけています。

皆川さんは東京を拠点にしていますが、20年以上前に肉親が岩手に移住したことを機に自身も盛岡を行き来するようになり、まちや自然の佇まいに魅了されたのだとか。すっかり惚れ込んだ盛岡への出店は10年くらい前から検討。その過程で今回の公募を知ったそうです。

東北初となる今事業では、「ホホホの森」というプロジェクトを提案。一ずつと受け継がれている「本来」的なのもの、人の労働たる「本質」、価値あるものを生み出す「本物」という3つのホを備えた盛岡らしい「森のような空間をつくりたい」と

は管理を行う民間委託事業者を公募によって選ぶというもの。民間事業者が自社で設置する施設と合わせて一定の公園エリアを総合的に管理し、施設で得た収益を公園整備に還元していくしくみです。設置管理許可期間の延長（10年→20年）や建ぺい率の引き上げ（2%→12%）等の特例措置によって、ビジネスとして参画しやすくなった点は民間事業者にとってのメリットです。

公共負担の軽減とともに、民間事業者の発想やサービス充実によって公園の魅力向上が期待される同制度。盛岡市では「木伏緑地」「盛岡城跡公園」「中央公園」の3公園に関して、Park PFIを活用しています。



「ホホホの森」の施設は、「もりおか歴史文化館」近くの芝生広場に建設予定。施設間の相乗効果にも期待

考えます。その思いを形にする藤森照信さんは、周囲環境との調和、自然素材を生かす特徴的な建築スタイルで多くのファンを持つ建築家。比類なき建造物は各都市の観光スポットになるほどで、近作の滋賀県「ラコリーナ近江八幡」は年間300万人の集客数を誇ります。藤森さんの建築手法として、空間づくりに市民が参加することも検討されているそうです。

現在は提案されたアイデアをベースに、建物の詳細を詰めていく段階へ。これまで2回行われた懇話会では「盛岡の未来をつくる大きなプロジェクトとして、しっかりと進めてほしい」と期待する声も多く、事業者と相談しながら具現化していく考えです。今後も市民向けのシンポジウムを検討しているので、ぜひ参加してほしいと高濱さんは呼びかけます。

芝生広場に隣接する「もりおか歴史文化館」の屋根には、盛岡出身の彫刻家・舟越保武氏が制作した『ふたば』という作品が配されています。まっすぐ空に向かう芽は、伸びゆく岩手の文化を象徴しているとのこと。事業者という外からの風が運ぶ種を育てる土は、地元で暮らす人々自身。未来へ向かう新しい風土を、この場所から共に育んでいきたいものです。

※参考／「東京都現代美術館」にて「ミナペルホネン」／皆川明「つづく」開催中（～6月16日）